衆議院憲法審査会・地方公聴会（2014・11・17盛岡市）

当日配布資料Ⅱ　加藤善正　岩手県生活協同組合連合会　会長理事

被災地支援活動を通じて聞こえる「声」

いわて生活協同組合

被災地支援活動担当　飯塚郁子

◎被災地支援活動担当としての関わりから見えるくらしとこころの変化

（1）震災から3年7カ月、自力再建する方や、災害公営住宅が少しずつ完成し転居する方など、仮設住宅を出ていく方が目立つようになる。

①県立病院院長のためいき「家を持つために栄養失調になるなんて」（2013年3月の報告）

②揺れる仮設住民…「喜んであげたい、でも寂しい」、「なぜ引っ越すことを言ってくれないの？」

「オラはこれからどうすればいいんだ」⇒「送り出してあげよう」という気持ちの変化

③新居に入ったけれど「寂しい」高齢者。（自力再建した家で一人）

④「仮設に残った人達とはもう会えない」と悩む自力再建した方。

（2）孤立する人々の現状…

①特に仮設住宅に住む高齢者は外出の機会がなく、近所に相談相手がいない。

②嫁と孫に出ていかれ、取り残される高齢者

③住環境が変化し周囲となじめず孤立する子育て世代の母親

④妻を、母を失った男性のひきこもり

⑤住民からの感情を受け止め、見守ってきたけれど…疲れが見えて来た生活支援相談員、仮設住宅自治会長

（3）話すこと・聴くこと・笑うこと・そしてみんなで食べることの大切さ～これからも寄り添うこと～

震災2年目夏以降、自分の居場所探しを始めた方が目立つ。「そろそろ外に出てみたかった」「自分も何かしたかった」「誰かに話したい」、「誰かに会いたい」など、特に在宅者が居場所探しを始めた

①誰にも話しを聴いてもらえなかったと感じた在宅被災者

「家が残って申し訳ない」、「誰かに会ったらどう話していいかわからないから出かけない」⇒「私の居場所がほしい」

②「一人で生きていくための訓練にお茶っこ会に参加する」、「仮設の家では私の居場所は台所。だからお茶っこ会に来てる」

③「今でも死にたいと思ったりするけれど、でも生きていたからあなた達に会えた」

④「みんなで食べるとおいしいね」、「今日は良い日だなぁ」の笑顔のためにこれからも寄り添っていく。

サロン・お茶っこ会の様子

お互いの信頼関係ができ、笑顔があふれます

全国から頂いたお花で仮設住宅に花壇が出来ました

6人の平均年齢は70代後半！ラジオ体操のあとのお茶っこ会。お元気

引っ越しが相次ぎ、住民が減った仮設でお茶もいただきながら、七夕飾り

みんなで食べると美味しいね、の笑顔です。

仮設住宅の方も、家が残った方も一緒にお茶っこ!

生活の不安、苦しさの声

①夫の給料が14万円。これをすべて借金の支払いに充てていて、生活は支援金や義援金を取り崩して生活している。うちは個人事業だったから、銀行はお金を貸してはくれないし、なにもなくなったのに、減価償却4千万円って数字が残っている。悲しくなる。（2012年10月：やさしい支援制度説明会にて）

②お宅を直して戻られたところに、以前頼まれていた手芸材料をお届けしました。お宅は本当に海のそばでした。1階が浸水したそうですが、「その程度じゃたいした支援金が出ないから、新しくできなくて直して戻ってきたの」とのことでした。怖くないですかと尋ねると「もうあんな津波は私が生きてる間には来ないと思っているから。でも、海がこんなに近くなって…」とため息をついていらっしゃいました。（2013年7月：活動報告より）

③仮設住宅に住む1軒1軒のケースが重くなってきた。思考がマイナスになってきていて、一人ひとりの話が長く、繰り返しが多くなっている。仮設暮らしが長くて抜け出したい気持ちが強くなっているが、見通しが立たないことの不安に揺れている。

④ストレス性睡眠障害を訴える方が増えた。高台に移転した方から、生活の不安（周辺に家も何もない）等を聞くようになった。

⑤高台移転が進まないことなどの不安もあるが、仮設の住民同士のトラブルや小競り合いが増えている。（例：足音がうるさい、生活音がうるさい等）また、ある団体のサロン開催中にケンカが始まったりしていて、今まで我慢できていたのが、こらえられなくなってきていると感じる。（2013年8月：陸高サロンミーティングにて）

⑥仮設の方から今後の不安が多く聞かれるようになった。「このままここで死ぬのかな」や独居の方からの「一人でここで死ぬのかな」など。また、在宅被災者から、土地のトラブルなどが出て来た。（例：震災まえに貸していた土地を返してくれない。震災で一時的に家を貸したのに、約束の期限だからと言っても出て行ってくれない）

⑦検診で大腸検査の異常がある方が多く、多くの方が再検査を受けている。

⑧自力再建した方で、高齢の方が慣れない土地に転居し孤立感を深めている。 親しくしていた方が再建して出て行き寂しいと話す高齢者が増えている。

⑨再建のための土地の造成が遅れてみんなが不安になっている。

⑩高齢の方で生活が大変になってきている方がいるので、相談していく。（2014年1月：陸高サロンミーティングにて）

⑪激しい雷雨のため、帰れなくなり皆さんと過ごしました。雨音、雷のとどろきがこんなに近く感じる事は今まであったかなと思うほどの音でした。高齢の方は「一人でいると怖いから、ここでみんなといる」と。他の方は「また、土が掘れるなぁ…」や、「これが夜もだったら眠れないんだよ」とおっしゃっていました。雨が弱まっても、音が近くに感じるので「雨漏り？」と聞くと、「雨が壁を伝う音」なのだそうです。…想像もつきませんでした。こんな雨が続くと布団が下からじっとりしてくるのだそうです。「いつまでこの仮設にいる事になるかねぇ」は、高台に移転予定の高齢の方の言葉です。「息子達とは一緒に住まない。もう別々になっちゃったから、ムリ。一人で家建てて、何年生きるかわからないけど、有り金はたいて生きることにした。好きに過ごすよ。今日いっぱい教えてもらったから、忘れないようにして一人になっても出来るようにするよ」と話されました。（2014年9月：手芸サロン報告より）

⑫この地域は陸前高田市内でも最も内陸で、津波で息子や娘など、次代を担うはずの世代が多く亡くなり、家は残ったものの、高齢者のみが残され一気に限界集落になってしまった代表の様なところです。震災後、住民は「家は残ったんだから何も言うまい」とさらに外に出なくなっており、低栄養の方や引きこもりがちの高齢者が増えています。

（2014年9月：陸高介護予防教室報告より）